学校便り
No. 6

万里一空

令和６年６月６日（水）
文責：池田　誠

昨年度まで６月は「いじめ根絶月間」でしたが、「心のきずなを深める月間」に名称が改められました。本校においても子どもたち同士のきずなを深める取組を行い、いじめの未然防止を図っていく予定です。本日の学校朝会では、その取り組みの一つとして「人と人の間を大切にする」ことを話しています。

話した内容は「悪口」に関することです。私たち大人でもストレス解消の一手段として、誰かの悪口を言うことで憂さを晴らすことがあります。しかし、人の悪口を言って楽しいのは一瞬であり、デメリットの方がたくさんあります。「精神科医がすすめる　これからの生き方図鑑（樺沢紫苑著）」の中で紹介されている悪口のデメリットを参考に、私が若いときに体験したことを次のように語りました。

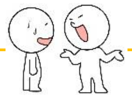
みなさん、おはようございます。

６月は「心のきずなを深める月間」です。心のきずなを深めるためには、始業式でお話をしましたが、人と人の間にあるもの、まず言葉を大切にしないといけませんね。今日はその言葉を大切にできなかった「悪口」についてのお話をします。本当にあったお話なので、しっかり聞いてください

校長先生がとても若かった時、クラスにＡ子さんという女の子がいました。Ａ子さんは、学習も運動も頑張る子で、クラスではリーダーとして活躍していました。でもＡ子さんには、１つだけ悪い癖がありました。それは、自分の機嫌が悪いときにクラスのお友達や先生にまで悪口を言う子だったんです。

例えば、「死ね」とか「むかつく」とか「うざい」とか「きもい」とか「くそじゃん」「よわい」とかです。もちろん、言われた子はとても嫌な気持ちになりますよね。しかし、お友達は誰もＡ子さんに注意することはできませんでした。なぜかというと、注意したら今度は自分が悪口を言われるかもしれないからです。校長先生は何回もＡ子さんに悪口を止めるよう指導しましたが、なかなか良くなりません。

この後、Ａ子さんはどうなったと思いますか。実は、お医者さんが言うには、悪口をよく言う人は、必ず不幸なことが３つ起きるそうです。



１つ目は悪口を言う人は、言わない人より病気にかかりやすいそうです。
２つ目は、悪口を言う人は、悪口を言うたびに自分の心が汚れていきます。人間は生まれたときの心は真っ白で奇麗なんです。しかし、悪口を言ったり悪いことをしたりするたびに心は汚れていき、本当に意地悪な人になってしまいます。悪いところ探しの名人になってしまうんですね。
３つ目は、悪口をよく言う人は、周りから友達がいなくなってしまいます。悪口を言っている人は楽しいかもしれませんが、聞いている人はどうでしょう。きっと「私も陰でＡ子さんから悪口を言われているかもしれない。」とか「人の悪口を聞かされていると、なんか嫌な気持ちになるなあ。」と思っているんです。悪口を言う人の周りの空気が悪くなり、人が近づかなくなります。

だから、とうとうＡ子さんが中学生になったとき、近くに誰一人友達が寄ってこなくなりました。それどころか、周りの子たちが一斉にＡ子さんの悪口を言い始めたのです。このことがきっかけで、Ａ子さんは学校に行けなくなってしまいました。

校長先生は、このことを聞いて、「小学校の時にもっと支援できたのではないか。」と思い、とても責任を感じました。

さて、あなたたちのクラスに悪口をよく言うお友達はいませんか。もし、そんなお友達がいたら、そのお友達がＡ子さんのようにならないようにするために、何かできることはないでしょうか。考えてみてくださいね。今日は人と人の間にある悪い言葉「悪口」のお話をしました。お話を終わります。

自己肯定感が低く劣等感が強い人ほど悪口を言う傾向があります。悪口で相手をおとしめ、自分の相対的な価値を高めているのです。

６月の「心のきずなを深める月間」では、友達への悪口や誹謗中傷がなくなっていくことを期待して、子どもたちの「自己肯定感」や「自己有用感」、「自己存在感」が高まる取組を学校全体や学年、クラス単位で積極的に行っていきます。